

## わが師の恩

関 信子



小学校から大学まで、いろいろな恩師との出会いの中で、最も印象に残っている先生がいる。それは、中学時代の担任の先生である。

先生は、髪を真中から分け、メガネをかけ、いつも背広姿で、毅然としており、ステッキを持ったままに英国紳士のようにであった。しかし、授業はいつも笑いの渦。先生のペースにはまり、どんどん引き込まれていく。勉強嫌いの私でさえ、夢中になって授業を受けてしまうほどすごい先生であった。

今年の一月半ばに、先生から『鈍足のたわ言』という随想集が送られてきた。尊敬していた先生の本を手にし、感銘を受けながら読み入っていた。しかし、まだ読み終えていないその三日後に、突然の訃報に接した。

肝臓ガンとの闘病生活の中で、最後の生きる力をふり絞り書かれ

たであろう二百六ページにわたる随想の一編一編から、先生の人柄が偲ばれ、涙が止まらなかった。

先生が最後に教壇に立たれた同じ川俣中学校に、現在私も勤めている。先生が通った同じ廊下を歩き、同じ教壇に立ち、改めて先生の偉大さを痛感している。

自己中心で生意気であった私の中学時代。一度、先生から厳しくご指導を受けたことがあった。それは、文化祭の準備の時である。学級の仕事もせずに、ポスターや看板制作の仕事を手伝っていた。すると、「おまえのやるべき仕事はこれか。学級の仕事はどうした。責任を果たせ」と一喝。その時の私は、徹底して反発した。扱いきらい生徒であったであろう。その後、「将来どんな職業に就いても、自分の立場や置かれた地位を考へ、与えられた仕事を地道にこなしてこそ、一人前なんだ」という

内容の話をされた。今思えば、それが先生の生き方でもあった。あれから三十二年も過ぎた今でも、先生の言葉が鮮明によりみがえってくる。中学生という多感な時期であるがゆえに、教師の一言がいかに大切なものか、師から教えられた思いがする。

四月、春うららかな日、窓越しに先生が立っておられるように思い、ふと外に目をやる自分になが笑う。「仰げば尊しわが師の恩」を深く感じられる年齢になった自分に、「しつかりやれよ」と拍車をかける。

(川俣町立川俣中学校教諭)

## お父さん、先生みたい

伊藤 俊一



久しぶりに家で過ごしている春休みのある日のこと、息子たちが家庭学習で学年のしあげをやっていました。始めはよくやっているなど思いながら、あまり気にしないで新聞を読んでいたのです。そのうちに息子に「お父さん、ここわからないんだけど」と言われて教え始めました。

私は一生懸命説明しているつもりなのですが、息子はどうもチンプンカンプンのようで、「どうしてこうなるの?」と言うのです。どう説明したら理解するのか考え

ていました。しばらくして別な方法を思いつき、「こうしたら、わかるんじゃないかな」と言い始めると、それを見ていた娘に「お父さん、先生みたい」と言われました。「だってお父さんは、先生だよ」と答えながら、家では父親なんだよなど思っていました。

そのときは、そんなに気にしないで、息子の分からないところを説明し始めたのですが、それでも分かってくれなくて、だんだんいらいらしてきて、しまいに私は、「学校でどう習ってきたの?」と